

# 合歡の会アンソロジー

Vol.2





# 2008

春なれば	荒木絹江	2
藻刈舟	石井宏幸	4
牛窓 初秋	岩崎ゆきひろ	6
花と光	植田桂之	8
滝	奥山登志行	10
風の音	小六誠一郎	12
風の盆	桜本滋子	14
春の潮	角南房子	16
勿忘草	田辺文枝	18
種蒔	辻田百代	20
白靴	富阪宏己	22
麒麟	名木田純子	24
風潜る	信里由美子	26
移ろひ	伴 明子	28
避寒宿	三木瑞恵	30
魚のこち	米元ひとみ	32
右足左足	渡辺牛二	34
俳句は切字	石井宏幸	36
あとがき	富阪宏己	38

春なれば

荒木絹江

風のなきまま冬空の相となる

大噓一人芝居を演じきる

石橋の振り返りつゝ凍解ける

石灘の失せてしまひし程の口

春きざむ音の列車に乗つてをり

春光を纏ひてみたき歩でありぬ

刀打つ音春晝を貫きぬ

咲き満ちてさゞめき合うてゐる桜

風のはや落花の行方決めてをり

揚雲雀すたと落ちて夜となり

藻  
刈  
舟

石  
井  
宏  
幸

犇きを歩む藻刈のリズムかな

漣の光寄せ初め藻刈舟

藻刈舟曳くや胸まで浸かりゐて

池ぢゆうの刈藻の嵩を舟に曳き

藻の山と汗の漢と相むかふ

鷹降りて雀零せる一樹かな

寄りて読む文の親しき白障子

雪まろげ芝の広さを残しけり

花いばら遠き潮止開きけり

巫女ちらと外を覗きゐる暑さかな

牛窓 初秋

岩崎ゆきひろ

ひときはの秋涼寄せし今朝の雨

赤のまま路地の奥なる美容室

秋蟬や話弾んでゐるベンチ

古町の路地の静寂や秋簾

同じ姓並ぶ浦路地秋の蝉

荒れ果てしまゝに大店朝の虫

風鈴や軒寄せ合ひて蜚の里

蟋蟀や文挟まるる長屋門

渦潮や向かひの島の蝉の声

秋風や軒に吊して蜚の網

花  
と  
光

植  
田  
桂  
之

春風や雑魚天匂ふ海の街

海棠の咲きたる庭の暮色かな

むらさきを藤は濃くして暮れにけり

梅池や天上に咲く水芭蕉

千の矢を大地に放ち夕立去る

秋簾卷かれ日の香をこぼしけり

まつ青な空へひと跳び鯨光る

透き通る明るさのあり冬刈田

縦線と斜線の世界冬木立

野焼の火風を誘ひて走りけり

# 滝

奥山登志行

滝を抱き雲を放てる峰のあり

峰を割り落ちくる滝の轟ける

暁闇の鐘隠々と滝の音

幽谷に日の割然と滝しぶく

幽谷の千古の滝の飛沫かな

溪谷の巖頭滝を吐き止まず

磐石を抉りて滝の一条に

岩を噛む樹々に一瀑滔々と

山の闇抜けし滝音空に抜け

天日の射せども滝の冷氣あり

風の音

小六誠一郎

丹頂のパドドウふはり春めける

アカペラのジャズ体ごと山笑ふ

チェンバロの弾む先駆け四葩かな

八月の鎮魂乱すヘリコプター

炎天やエンジンポンプ休みなく

秋天に美しきロスマリンかな

風寒しB52の博物館

白き歯やマツキンレーの冬に死す

シヤリアピン聴きし火照りやマント手に

フルートにスタツカートあり花に風

風の盆

桜本滋子

稲の香や越中おわら人の波

この橋を渡れば会へる風の盆

三拍を打つて始まる風の盆

幽玄の闇に胡弓や風の盆

越中おわらそれて脇道虫時雨

指揃へ祈る心や風の盆

眼差は過去か未来か風の盆

魂のどこか目覚めて風の盆

情念の静かに燃ゆる風の盆

秋灯風の吐息か胡弓の音

春の潮

角南房子

春の潮大河のごとく上り来る

踊り場に遊んでをりし木の芽風

虹消えて取り残されし空の色

炎昼にさらされ影もなく歩く

遠のきてどこか淋しきはたた神

渡し舟波の静かに秋灯す

実南天一粒づつにある夕日

初霜のきらめく畦を踏んで来し

瀬戸内の風美しき冬日和

日当たりて妖精のごと小雪舞ふ

勿忘草

田辺文枝

水色の生まれて勿忘草かな

秘密めく薔薇のアーチをくぐりけり

鯉幟山従へて翻る

水打ちて風動き出す通りかな

秋暑し言葉少なに日を終へぬ

風のみが移ろひゆけり秋彼岸

日だまりを選びてたんぽぽ帰り花

階段は歩いて上る冬の駅

診察に不安のよぎり風花す

残雪のこの山陰の節分草

種  
蒔

辻  
田  
百  
代

指先の加減迷はず種を蒔く

指先で鈴振るやうに種を蒔く

母の日の今年は母を偲ぶ日に

尺蠖のストレッチてふ伸びちぢみ

手許より夕日暮れゆく草をとる

ストレスも何もなき顔大昼寝

父母つれて兄の来ませる門火焚く

秋の蟬一途に鳴いて夕ぐるる

悲しみの心打ちたる鉦叩

偲ぶ人又一人増え夕月夜

白靴

富阪宏己

絵の中へ白靴歩みゆきにけり

白靴と下駄はき替ふる夜道かな

白靴の白より白き脛ならん

べガを見る白靴芝を踏みながら

白靴の洗ひざらしの布地かな

子を見舞ふ白靴子には見せまじく

白靴をはいて生徒の輪の中へ

退院の日の白靴の誇らしく

リハビリの母の白靴棺の辺に

白靴や百寿の恋を夢に見ん

麒麟

麟

名木田純子

亀鳴くやこれより黙の法の池

春禽の声の中より日の生まる

聞きもらす人には鳴かず初蛙

春の鴨水尾は光となりけり

蝶々の消えし方角より日差

はるかなる夜景下にし蟲の闇

百獣の王の雄叫び冷まじき

朝露を踏み放牧の牛の群

かなかなや宇治十帖の恋の道

秋天へ麒麟の首のなほも伸び

風  
潜  
る

信  
里  
由  
美  
子

風ほのと花の暮色を揺らしゆく

はくれんの雲にならむと揺れてをり

沈丁に触れては風の膨らみぬ

佇めば落花の風のすれ違ふ

黒南風のゆき渡りたる森の音

ゴンドラの雲の峰へと風潜る

雲の峰抜け出してゐる雲の峰

雲の峰音なき音ののぼりゆく

峰雲を仰いで雲の音の中

雲の峰翳あをあをと雲の中

移  
ろ  
ひ

伴  
明  
子

木洩日にときめき沈め蝶の昼

木洩日の樹間の木肌風光る

木洩日のまだら獣めく暑さ

木洩日の曼陀羅説くか道をしへ

木洩日の杉の深さや夕立あと

木洩日に秋風惑はされてをり

木洩日の大騒動や鳥渡る

木洩日の午後より失せて冬近し

木洩日に散り木洩日に積む木の葉

木洩日に波音聴いてゐる日永

避寒宿

三木瑞恵

離島へと避寒の旅の身の軽く

Tシャツで過ごせる島へ避寒かな

着陸す避寒の島をあをあと

雪を抜けハイビスカスの咲く島へ

水牛車避寒の旅を乗せてをり

島唄や避寒の旅ののんびりと

島唄に酔ひたる時のしぐれかな

大海鼠珊瑚の揺らぐ海の底

美しき海鮑かず見て避寒かな

泡盛を夫といたたく避寒宿

魚のこちち

米元ひとみ

めぐらせる 葭簀に魚のこちちかな

黄身ふたつ盛りあがりたる涼しさよ

白南風や床に大きくもめん裁つ

菜を洗ふ水の涼しく真昼なる

家壊す音をとほくに冷奴

縫物のあひだ冷して葛桜

切り分くることの愉しき西瓜かな

初生りの西瓜の甘く種多く

雷雨来る土の匂ひを追ひたてて

まだ跳ねて雷雨のあとの水たまり

右足左足

渡辺牛二

義理チョコの小ぶりのリボン春浅し

花疲れ足に重たき安全靴

ブラインド鳴らし五月の風通る

寄り添うて水脈一つなり残り鴨

くちなはの先づは文様確かむる

鳴く声の数ほどあらず蝉の殻

放たれて犬遠くあり大夏野

炎昼を運ぶ右足左足

こほろぎや事務所にもある虫の道

一村を覆ひて余るいわし雲

## 俳句は切字・・・

失う。

俳句を始めて、二十年九月で丸三年が経過。この三年間でそれまで知っていた花鳥風月等の名前をはるかに凌駕する数の名前を覚えた。それも、自然に。歳時記の季題に初めて触れ得た

特に、切れを作る場合に切字が古めかしいからと避けたことは一度もない。逆に、句の立ち姿が凜とする、省略を行い、説明的な句いのよくなものを効果的に消すと考えている。

時の感動は今も変わらない。高梁の路地裏の時計草、児島半島の鷹、湯原の溪の釣船草。三瓶では雪伽を雪伽として初めて聞いた。俳句を通して、自然に自然と親しんできたと言っている。

「霜柱俳句は切字響きけり

石田波郷」

まだ三年間の句作ではあるが、自分の感動の中心がその景のどこにあるのかを判別する感性と、感動の中心をどう言葉にするか、また、その言葉を活かすために句のどこに切れをもつてくるかが問われると考えている。感動の中心以外のことも詠んでは、散漫で詰め込んだものになるし、切れがなければ、句の広がりや強さを

俳句は句座の文学である。師、先輩方に導かれ、句会においては、出来る限り感性を研ぎ澄まして句作、鑑賞を行うことにより、独りよがりとなることを防ぐ。その積み重ねを大切にしながら、季題と切字の力を信じ、今後も切字の響く俳句を目指し、句作を続けたいと考えている。

石井宏幸

## 一日一句

合歡の会では、一日一句を提唱している。

実行できている人は皆無に近い。

句会では、七句出さないと、句が足りない句が足りないと言われる。だから、作る。

私もそうだった。句会以外では、作句など忘れていた。作らなくとも、誰からも何も言われなかった。町内会のバス旅行のように、可憐な草花の前で、缶ビールを呑んでもよかった。瑞々しい感性は、ビールと一緒にオシッコとなって流れた。

いつ、どこで、何をしていても作句する。これは易しくない。強い意志を必要とする。誰かに、口やかましく言われなければ駄目なのだろうか。一日一句を実行せぬ人には、「督促」と大きなゴミ印を押した葉書を送りつける督促係が必要なの

のだろうか。

一日一句が習慣になれば、感性が磨かれ、ときには、一〇句できたりもするだろう。

アンソロジーは、年一回が二回に、二回が三回にと、着実に発展するだろう。

そのとき、合歡の花咲く径を作ろう。山路に合歡の並木を植え、その緑陰に句碑を建てる。それぞれの人が、アンソロジーから厳選した、一世一代の句を刻む。

いつの日か「合歡のこみち」と呼ばれ、訪ねる人の絶えない、文学の名所となろう。

「合歡咲いて百の句碑建つ径かな」

富阪宏巳

## 編集後記

◆今年はずばらしい出会いをさせていただきました。緊張しながら出かけた足守吟行で、その緊張をほぐすように暖かく迎えてくださった先生を始め皆様方、ありがとうございます。この出会いを大切に、また初心に戻って勉強をさせていただきますので、皆様どうぞよろしくお願いたします。

◆さて、アンソロジーVol.1、2、皆様のご協力でこうして完成いたしました。原稿をお寄せいただいた皆様ありがとうございます。編集委員の皆様お疲れ様でした。純子さん、イラストをありがとうございます。

そして、アドバイスとご協力を頂きました弘文社の皆様、ありがとうございます。

◆編集者の特権で一足先に読ませていただきましたが、Vol.1とは違った皆様の意欲と力を感じました。皆様はどう思われたでしょうか。この意欲と力が次につながり、アンソロジーの発行はやがて年一回が二回となり、三回となるのでしょうか。編集会議でのうれしい悲鳴が、聞えてきそうです。

◆早いもので、もう季節は冬です。風邪など召されぬよう、寒さ対策を十分に、季語と出会いに出かけましょう。一日一句です。  
ご健吟ください。

(牛二)

## 合歓の会アンソロジー Vol.2

平成20年11月9日発行  
発行 合歓の会  
印刷 弘文社（津山市）  
発行責任者 富阪宏己  
連絡先  
〒701-0304  
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144  
富阪宏己方



